
NO NAME

十久紅音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NO NAME

【Nコード】

N7780Y

【作者名】

十久紅音

【あらすじ】

特に特長はない。なのに何故かモテる少年、名梨克己は悪の組織の戦闘員である。

彼は世界征服による世界平和のために今日も生きていく。

774の朝（前書き）

特撮が大好きです。ヒーローはもちろん、出てくる悪役も好きです。特に仮面ライダーの映画に出てきたガスマスクのシヨツカー戦闘員が好きです。

774の朝

2XXX年、世界中にヒーローが存在する時代。そのヒーローを育て上げているのが「英雄機関」。当然、日本にもヒーローが存在する。そして必然的に悪の組織も存在する。

「う、うん……」

窓から差し込む朝日と枕元で鳴り響く金属音。それから2つのコラボレーションにより、俺は目を擦りながら重い瞼を開けた。

布団から這いずり出て日の光を浴びながら背伸びをする。空を見ると夜空の黒から晴天の青に変わる途中のダークブルー。ダークブルーの空の下に目覚めた。なんか歌詞が書けそうな気分だが書くものも書かれるものもないのでそれは無理だろう。

「朝飯、喰おう……」

そう自分に言うように呟き部屋の外に出る。

と、扉を開けたその時。

「774っ！」

「うおう!!」

扉を開けた瞬間、俺に何か飛び込んできた。俺は何か、いや、誰かを抱き止める。

飛び込んできたのは俺より年下の十歳前後の少女。

「おはよ。774」

少女は俺に朝の挨拶をしてくれた。

「おはようございます。首領」

俺は笑顔で挨拶を返す。

すると少女もニッコリと嬉しそうに笑い、俺の服の袖を引っ張り、長い廊下を歩き出した。

「おろろも、お兄ちゃんも、皆も、朝ごはん食べに来てる！774

も早く早く！」

「はい。わかりました。首領」

俺はそのまま、首領とともに長い廊下を渡り、食堂へ向かった。

〵

俺の名前は名梨克己^{ななしカツミ}。井戸中高校に通う17歳である。

そして秘密結社ユートピアのNo.774の戦闘員である。

774の朝（後書き）

短いですが、読んでくださりありがとうございます。まだネタ無し
のノープランですが見事に完結させます。

第一話「774と学校」(前書き)

今回は単なる主人公の1日です。
関係してる人物が出てくるだけです。

第一話「774と学校」

食堂

わいわいがやがや、と十数人いる食堂は雑談で賑わっている。

「774〜。こっちこっち」

と俺の服の袖を引っ張り、首領の夢見理想は席まで連れていってくれた。

「ありがとう。首領」

「一緒に食べるの〜」

と俺の隣の席に首領は座った。

テーブルにはすでに朝食が用意されていた。

「いただきます」

「いただきます〜」

食べられる命に感謝を示して、スプーンを手を取った（ちなみにメニューはバターライスにコーンスープ……朝食にしてはがっつりしてないか？）

「774〜」

「はい？」

「食べさせて〜」

と言つて首領は口を大きく開けた。ああ、首領。可愛いなあもう。

……ゴホンゴホン。

「わかりました」

スプーンを右手に持ち、バターライスをすくう。左手をスプーンの下に添え、首領の口元まで持っていく。「はい、あ〜ん」

「あ〜ん？」

首領は小さい口を大きく開け、バターライスを頬張った。

「もぐもぐ……。おいしいの〜」

「首領。食べながら喋ったら駄目ですよ？」

「はい、なの」

「やれやれ」

あどけない首領を見ていると、思わず笑みがこぼれてくる。

可愛いなあ……。

「克己さん？」

「うおわあ!？」

いきなり背後、というよりも耳元で、ボソリ、と名前を呼ばれた。誰でもびびる。

「あ、ああ……。草薙」

「名前」

「……おろろ」

「はい」

いつの間にか俺の後ろにいたのは、女幹部の草薙おろろ。俺と年齢は一緒だが、立場的には彼女の方が上だ。

「おはようございます。克己さん」

「おはよう……」

しかし幹部である彼女が俺に敬語を使い、戦闘員である俺はタメ口である。まあ、おろろは誰にでも敬語を使う。だが彼女は俺にタメ口でいい、というかタメ口を使うように強制させられた。何でだろう？

俺のことだけ名前で呼ぶし。

「首領？ 克己さんを困らせちゃ駄目ですよ？」

「いや、別に困っ「駄目ですよ？」」「……」

「うう、わかったの」。

と言って、首領は去ってしまった。

おろろ……。おまえ時々スゲー怖いよ？

「克己さんも」

「はい？」

「学校があるのにゆっくりしすぎですよ？」

「あ、ああ。ゴメン」

そうだった。今日は月曜だった。

「制服にお弁当、あとハンカチ、ティッシュも用意しましたからね？」

「ああ、わかった。いつもありがとっ」

「つぶ、いいんですよ。将来の練習ですから。つぶ、つぶ……」
頬を赤らめながら、おろろは呟いた。……少しこええ……。

）

通学路

朝食を終え、着替えを済まし、学校へと向かう。
と、その通学路の途中。

「あ、克己」

「流子さん」

バイトの先輩に出会った。「おはよう」と互いに挨拶を交わす。

青田流子。バイト先の先輩であるお姉さんだ。

「今から学校？」

「はい。流子さんは？」

「バイト。フリーターは生計立てるのに苦労するわ」

「そうですか。まあ、頑張ってくださいね」

何気ない会話をして、俺は流子さんの目的地とは逆の方へ歩き出した。

）

「ふふ……。朝から克己と話せるとは……今日は良いことありそう
だ」

）

ゾクリッ、と一瞬寒気を感じた。何だろうか……？

不安だなあ……。」「せ、先輩っ！！！」

「ん？ああ、桃瀬ちゃん」俺に対する呼びかけらしい言葉に反応して振り返る。そこにいたのは1つ年下の後輩、桃瀬薄紅ちゃん。

それなりに親しいので“ちゃん”付けだ。

「珍しいな。いつもは登校する時には会わないのに」「は、ハイ！
！なので一緒にお喋りしながら、一緒に行きませんか!？」

「あ、ゴメン。今日ちよいと急がなきゃならんから」「じゃあね、と手を挙げその場から俺は駆け出した。

）

「……………」

「いえ、マイナス思考はいけません……」

「先輩は用事を優先したとか、私と登校したくなかったのではなく……」

「そうです。照れたんです。きっと……………」

）

「……………」

何だろう……。今度は強い念を感じる……。

「最近、疲れてんのかな……………」

「昨日も任務あつたし……。」「はあ……………」

「なあに朝から疲れたように溜め息してるのよ。朝からテンションが低いわねえ」

「ああ……。秋沙か」

机の上につ伏しているとクラスメイトの黄城秋沙が話しかけてきた。

「何よ？どつでもいいような感じね？」

「うん」

「……」

「ああ、ゴメンゴメン。嘘嘘」

秋沙は人に嫌われたり、どつでもいいように扱われることを嫌う。とつか苦手つぽい。

今だつて泣きそうになつたし。

「……ま、いいわ。アンタが他人に冷たいのは知ってるし……」

「ん？なんか言つた？」

「いいえ、何も」

……機嫌直した途端これかよ。むかつく……。

「それより。なんか疲れてるみたいだけど、大丈夫なの？」

「ん……。ああ、まあ」

最近忙しくなつたのは確かで、その分疲れている。

まあ、世界征服という野望は大変なのは当然だし、どつつてことはない。

「まあ、大丈夫だ」

「ん。それならよろしい。体調崩されて約束オジャンにされたら嫌だしね」

約束……？

ああ、今度買ひ物に付き合つというあれか……。

「わかつてる。俺は約束は守る男だ」

「ならいいけどね」

「……。じゃ、俺は授業始まるまで寝るので」

「え？いやまだ話は」

「……」

「はや……」

眠りの世界へと全力疾走する俺の意識はそこで途絶える。

（（

昼食時間。

嫌な予感がするので足早と屋上へ向かう。

「克己。一緒に食べ……あら？」

「せんぱい。一緒に食べ……あれ？」

「あ、薄紅」

「あ、秋沙ちゃん」

〃

屋上。

空は太陽が君臨し、空を青く染め上げている。

この屋上にいるのは俺こと名梨克己。

と、先客一名。

「よう……」

「ああ。克己か」

黒山影朗。クラスの違う友人だ。

「おれたちは今こうして平和を味わっている。しかし、この平和には一体どれほどの犠牲が」

中二病真っ盛り。

まあ、最初から聞いちゃいないし、ほっといて弁当食べよ。

「……………」

弁当箱を開けると、まあなんとモハートを強調された中身。何だろう？愛妻弁当って感じ？

「（ウンタラカントラ）」

「うん、うまい」

ひとり喋る影朗をよそに俺は、弁当を堪能した。

〃

放課後。

今日も任務があるのでとっとと帰る。ひとりで。

「克己は……いないわね」

「先輩は……いないですね」

「克己は……いねえな」

「では、三人で帰ろう」

「そうね。はやく基地に帰りましょ」

「わたしたち戦隊ヒーローはいつ出勤があるか、わかりませんもんね」

第一話「774と学校」(後書き)

展開がないところらもやはりつまらないですね。次回からは世界征服活動を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7780y/>

NO NAME

2011年12月29日10時52分発行